

文法ノート

廣 瀬 正 宜

本書はコミュニカティヴ・アプローチを取り入れた、大学生のための日本語初級教科書である。将来上級日本語を学んでいく上で必要なしっかりした基礎をつくるために、充実した文法シラバスを土台にしている。

文法項目の選定にあたっては、既存の主要初級教科書の文法項目を調べただけでなく、広く文法書などにもあたり、また、伝達上必要であることが経験的にわかっている表現も取り入れた。配列については、理論だけでなく、実際に試用版をいくつか使用して経験的に学びやすい順序をわりだしてまとめた。結局、全30課構成で、各課に4～5項目を配列し、順番は比較的スタンダードなものになった。第1課で名詞は名詞です。という文型（否定形Nじゃありません。）をもとに、日本語の語順の後置性、すなわち助詞が名詞の後ろにくること、述語の位置が後ろであることを導入し、疑問文の作りかた（最後にかを付加してつくる）を導入する。助詞ははともを使用。連体助詞の（所有ののを含む）、指示代名詞これ、それ、あれ、どれを導入している。これらは人や物を紹介するのに必要な表現なので第1課におかれている。

以下、第2課で数字を導入し、時刻や値段が言えるようにし、第3課で動詞が導入される。第4課で間接目的を含む動詞文。はとがが導入されるのは第5課である。第6課以降についてはいちいちあげることを省略するが、後ろの課にいくにしたがって、ヴォイスやモダリティがとりあげられており、基本的に生活に役立つ表現を使いながら、初級でおさえておくべき基本的な文法事項がしっかり学べるように工夫されている。

本書の文法は、学校文法ではなく、記述言語学に基づいた文法を枠組みとしている。国語の学校文法の枠組みが外国人に対する日本語教育には有効ではないことはいまさら議論することもない。日本語教育のための文法は、日本語を世界の中の一言語として客観的に言語学的に分析して得られる日本語の文法でなければ、だれにも分かりやすい、納得のいくものとはならない。そのことは、天動説がたとえきわめて複雑な仕方ではあってもそれなりに天体の動きを説明できても、地動説の方がはるかに簡単に、整合性のある説明ができるのと似た関係とも言えるであろう。

日本語教育の現場では、よって立つ文法観が確立していないために、文法事項の説明が必ずしも一貫性がなく、あることがらは学校文法的に説明され、別のことがらは別の枠組みで説明されるという具合に、局所的に一見つじつまが合う説明、いわばその場限りの説明がなされることが往々にしてあるようである。全体としてはばらばらな説明となり、結果として学習者の頭の中にはさまざまな文法観が混在し、混乱してしまうことになる。

たとえば、本書では文法用語にも注意をはらってある。品詞の呼称を例にとると、動詞はVowel Verbs（母音動詞）とConsonant Verbs（子音動詞）およびIrregular Verbs（不規則動詞）の3種類、いわゆる形容動詞はAdjectival Nouns（形容名詞）である。

動詞を母音動詞、子音動詞として扱っていることからわかるように、動詞の「活用形」についても、学校文法のそれとは考え方が大きく異なる。まず、「語幹」のとらえ方からして違う。したがって、「活用語尾」のとらえ方も異なっている。詳しくは、教科書を見ていただきたい。

市販の日本語の文法指導書の中には、たとえば可能形について、動詞Ⅰは「え段」の形に「る」をつけた可能動詞を用い、動詞Ⅱは「ない」の形に「られる」をつけた形にすると説明しているものがあるが、これでは動詞Ⅰと動詞Ⅱではなぜ扱いが異なるのか説明ができない。また、近ごろ話題の「ら抜き」ことばの説明ができない。さらに、その他のいわゆる「助動詞」がついた受け身形や、尊敬形、使役形などの場合と可能を表わす形式とが扱いが異なることになってしまう。これはまさに天動説的説明である。文法は、実は、単純な規則（煎じ詰めれば原則）から成り立っているものであり、こんなところまで、いちいち別の規則を持ち出さなくてはならないような複雑なものではない。当然ながら本教科書では一貫した説明がなされている。

初級の段階が一番時間がかかり、大切な基盤形成の時期であるから、この時期に学習者にしっかりした基礎文法を確立させておく必要がある。本書の文法説明はこのような点を意識して、一貫性を持たせるように努めた。にもかかわらず、実際に使用してみれば問題が多々出てくるにちがいない。今後ともよりよい教科書を目指して改訂していきたい。